

新羅統一時代、高麗時代前期及び後期の四段に分ち、朝鮮の著名なる金石一百を選んで收載し、之に就いて一々所在、形状、解釋、撰、書人年代の考證等を詳細に説述されたものである。必要なる個所には、夫々適宜なる寫真版を挿入して理解に便し、又最も多とすべきは一金石毎に、その參考文獻を仔細に附記して示されたことである。假令ひ少許の遺漏はあるにしても、讀者に與ふる便益之より大なるはない。この學及び學界に對して敬虔忠實な著者の態度は、本書一卷を通じて流れる所であり、徒らな獨說獨斷を避けて、常に學界の業績の集成と、その冷靜嚴格なる批判とを以て終始せらるゝ、重篤な學風は洵に悦ばしいものである。本選釋篇中、李氏朝鮮の金石文研究に及ぶものなきは若干物足らない感がないでもないけれ共、著者は別にその研究の用意ある旨を付言してゐられる。

最後に「寶林寺毗盧舍那佛に就いて」以下十篇の研究論文を收めて研究篇を樹てられた。「新羅高文王に就いて」「柶戲より觀たる上代の日鮮關係」等は必ずしも金石に關した論究とは言ひ難いけれども、その獨自にして又興味深い見解は却つて特に注目せらるるものではあるまいか。前者は故今西博士の説を正して學界已に定評あるもの、後者は萬葉集中難解とされてゐた三伏一向、一伏三起等の語を朝鮮の柶戲によつて明解された興味深い一篇である。

尚卷末には索引を附するの用意を怠らず、要するに朝鮮金石學を最初に集大成せられた本書は飽まで讀者に丁寧親切である。著

者はさきに朝鮮金石總覽、同補遺の編纂に當つて最も力を效した一人であると聞く、宛も本書は前書の姉妹篇とも言ふ可きもの、更にこの同じき著者によつて、朝鮮總金石釋解の完成される日を期待して已まない。(菊七三四頁、岡版廿九葉、昭和十年八月、京城大阪屋號書店發行、定價五圓) (以上今西)

○Arminio Janner: Individualismus und

Religiosität in der Renaissance.

ブルクハルトがルネサンスを中世と對立せしめ、靜的史觀に立つてルネサンスの本質を把握せんとしたのに對し、歴史の連續性を重ずる立場よりルネサンスの開始を中世へと遡らしめる所謂 "Wurzelscheiter der Renaissance" が現はれ、それ等の人々によつてルネサンスに於ける中世的要素が重要視されると共にその宗教性が問題となつたことは既に周知のことである。しかしながらかかるルネサンスの起源探究及び宗教性的の問題は主として獨逸學界に於て提出せられ論議せられてゐたが、これに對するイタリヤ學界の見解についても一應注意を拂はねばならないのであつて、本論文はそのルネサンスに對するイタリヤの研究角度を紹介せる點に我々の興味を引くのである。筆者はイタリヤに於ては獨逸學界に於て Eppsteinmer が力説せる論點は自明であり、イタリヤの研究角度は單純にして非問題的で Bueckhardt, De Sanctis の立場を確保してゐると述べてゐる。以下その論旨のみを紹介するに止める。

Thode, Gebhardt, Sabatier, Courajod 等のルネサンス起源の研

究によつて中世とルネサンスの對立は解消せしめられ中世の多くの部分がルネサンス化せられた。しからば何故ルネサンスの開始の問題に於て所説の對立を見るか。それはブルクハルトの Individualismus の概念が二様の解釋を有つてゐるからである。一つは dämonisch-helmsche Indiv. である、Kultur der Renaissance の「藝術品としての國家」及び「道徳と宗教」の二篇に最もよく述べられてゐる當時の支配階級の Absolute-auf-sich-gestelltsein を云々のであり、他は一更深い解釋として「人間の發見」によつて考へられる生、美、善の肯定を意味する Aesthetische Indiv. であつて IV 第二篇第一章の冒頭に最も明瞭に述べられてゐるものである。かくの二つをブルクハルトの Individualismus の解釋の二面性に注目してルネサンスの開始を中世へと遡らしめる立場を見るならば、それは Indiv. の一面的解釋によることがわかる。即ち彼等の云々 Indiv. はたゞ新しき、独自の、力強き個人の出現によることを意味するからである。Ernst Walsers は全く正しく Sabatier の説に對し Obedientia を最高のイデアルとするフランチェスコは中世人なりと主張したのであり、亦十四、五世紀の北方藝術に於ても中世との關聯が大なることを知り得るのである。かくて Hinzinger に於てはルネサンスの起源の問題は休止しルネサンスと宗教改革の問題となつたのである。

イタリヤに於てはルネサンスの起源探究者は出なかつた。De Sanctis 以來イタリヤ人にとつてルネサンスは市民的意識を持つてゐるボッカチオの笑ひの世界であり、ボッカチオよりアリオストハ、

デオットーよりラファエルへの發展は直線的であり、ダンテについては新時代豫告者ではあるが、その理念は全然中世的であると考へてゐる。しかしこれには反對があつた。それはカトリック的立場よりなされたのであつて Pastor は少くともルネサンスの一部をカトリック思想のために救ひ出さんとして 異教的ルネサンスとカリスト教的ルネサンスを區別せんとし、その學統をついで Origiani, Toffanin, Zabughin 等が出た。彼等はルネサンスの中に religious-christlich な人物を求め、それによつてルネサンスの宗教性を主張し、中世は反動宗教改革に至るまで繼續したと述べたのである。しかしこれは決してルネサンスに於ける新しきもの、未來を包含せるものを求めたのではなからぬ。Walsers も亦若干の修正を含んでゐるがこの立場にあつた。

これに對して Giovanni Gentile, Giuseppe Saitta の研究は全くブルクハルトの立場によつてなされておらず、亦 Croce, Guido de Ruggiero も同様の立場である。Gentile は “Giordano Bruno e il pensiero del Rinascimento” (Firenze 1925) に於て Bruno の De homines dignitate 中の有名な言葉を引用し人間の價値及び權威が充分認められた時期を以てマンニスムスの時期とし、Gianozzo Manetti, L. B. Alberti, Ficino 等をあげ、更に Gallizi, Leonardo をくわへて Bruno, Campanella に至るまでをのべてゐる。この立場は彼の門弟 Saitta によつてけがれた。彼はその “L' Educazione dell' umanesimo in Italia” (Venezia 1928) に於て理論家よりはむしろ實際家によつて考察し Guerino Veronese, Vitorino da Felice

の二教育家をとり上げ、彼等の教育方針が肉體精神兩面の鍛鍊にあること、換言すれば教育に於ける綜合統一を考へた點に中世とは全く *französische* 新な斯岸的な教育觀點があり、このことは個人感情及び個性の發展には意義深いものであると述べた。更に *Matteo Palmieri* が教育は社會に役立つものでなければならず、修道僧や隱者の如き孤獨生活を排したことに就て述べてゐる、かくのごとく *Genile*, *Saitta* の研究を見る時我々はブルクハルトがすでにこれ等の點を正しく把握してゐたことに驚かされるのである。

最後にルネサンスは宗教的なるかどうか。ルネサンスの進行と共に宗教は *Natürliche Religiosität* より *Panteismus* となつた。ルネサンスに於て生活や世界の斯岸性、内在性が強調されるかぎりブルクハルト同様、ルネサンスの非宗教性を主張せねばならない。たとへば *Boccaccio* の立場は眞の基督者の宗教一般の墮落に對する反抗でも、亦、粗野な官能性の解放でもなく、それは最早基督者ならざる者の優越的な笑ひである。そしてこれは *Lorenzo Medici*, *Poliziano*, *Ariosto*, *Macchiavelli*, *Gucchiardini* に於ける見られるもので彼等はいづれも宗教には無關心だつたのである。

以上の如く筆者はルネサンスの起源探究者の立場に對し、個人主義と宗教性の問題によつてルネサンスの起源追究及び宗教性の強調に反對し一般にイタリヤルネサンス研究界の研究角度を述べた。内容に於て特に秀れた見解も見當らないがイタリヤ學界がブルクハルトの立場に強固な基礎を置いてゐることを述べてゐる點に興味が引かれる次第である。

尙別の問題ではあるが筆者が冒頭の註の中に *Weise* の論文の正當なることを評した後、美術史の領域に於て妥當なりと云つてこれを直ちに時代一般に擴充して考案する危險について *Trecciano* の藝術とその時代の世界觀についての *Ben*、更に *Quattrocento* 後半イタリヤ美術に於ける最後の *モーター* 的潮流の事實を以て直ちに *Pulci*, *Boiardo Ariosto* 等の *Ritterpoetik* の隆盛の事實と關聯せしめざるを排し、*Ritterpoetik* は中世的傳統によつて起つたのではなく全く新しい精神を以て起つたものであると *Antigonisch* であり、かくルネサンスには多くの並行現象の有する事を指摘してゐるのは注目すべきである。(Deutsche Vjs f. Literaturwiss. u. Geistesgesch. 1935 Heft 3) [聽見]

○ コール交通及び聚落と地形

淡川康一解説

J. G. Kohl. 1708-1878 *Der Verkehr und die Ansiedlungen der Menschen in Ihrer Abhängigkeit von der Gestaltung der Erdoberfläche* Dresden 1841 は聚落地理乃至交通地理の權威あるラシツクとして現代に於ても、その價值を失はず、この方面の著述の冒頭に常に引用される處である。併し該本は約百年前の出版に係る爲今日では殆んど稀觀書の部類に屬し、之を披見し得る便宜は少く、例へ原書に就き得たりとするも、多くのクラシツクがさうである如く、龐大、難解であつて、之を讀破してその眞髓を把握する事は容易でない。名古屋高商教授淡川康一氏は既に經濟地